

## 日本型シティズンシップの形成 —1950年代の文化と政治を再考する—

中京大学 亀山俊朗

### 1 目的

本報告の目的は、戦後形成された日本型シティズンシップの特徴を、とくにその文化的側面に注目しながら、政治的・経済的側面と結びつけて明らかにすることである。

20世紀中盤に確立されたといわれる福祉国家的シティズンシップは、近年一元的な国民文化やナショナル・アイデンティティを前提としたものであるという批判を受けている。また、従来の議論では経済的ないしは政治的課題、あるいは国内的課題ととらえられてきた貧困（シティズンシップ研究の最大の課題の一つである）などの諸問題の、文化的次元やトランスナショナルな次元が注目されてもいる。こうした現状を踏まえ、本報告はナショナル・アイデンティティとコスモポリタニズムの相克という、シティズンシップとグローバル化に関する社会学研究における現代的課題に示唆を与えることを目指す。

### 2 方法

本報告は、文化事象を従来からある作家論・作品論としてではなく、シティズンシップ研究という社会理論の枠組みで検討する。また、戦後の文化史研究等において、占領期や1960年代の高度成長期に比べるとそれほど重視されていない、しかし政治的には節目の年代である1955年前後に焦点をあてる。文化・社会・政治的事象をある年代で横断的に検討することにより、現代の日本社会や市民のあり方の祖型を明らかにし、現状分析のための示唆を得ようとする。

今回特に注目するのは、小説家・批評家の大西巨人（1916-2014）である。大西が文壇に名を知らしめたのは、批評「俗情との結託」（1953）を発端とする宮本顕治らとの論争である。大西はその過程で代表作『神聖喜劇』を着想し、1955年に執筆を開始する。この作品で彼は、旧日本軍を隔絶された「真空地帯」（野間宏）ではなく日本社会の「縮図」（大西晩年の作品名でもある）ととらえ、内外の文芸や批評を大量に引用しながらその特殊性と普遍性を明らかにしようとした。

大西の作品は、評価するにせよしないにせよ、日本の「文壇」とは一線を画した、独特のものであると考えられがちだ。しかしその作品は、少なくともその企図において社会から切り離された「真空地帯」ではありようがない。とすれば、その活動は広い社会的文脈の中に位置づけて検討されなければならない。

本報告では、大西の諸作品を内在的に分析するとともに、その背後にある花田清輝（小説家・批評家、1909-1974）らが組織した表現者のネットワークにも注目する。そこにはいまとなつては大西とは無関係に見える、丹下健三（建築家、1913-2005）、岡本太郎（美術家、1911-1996）といった多様な表現者が参加していた。彼（女）らが共有していた価値観や社会構想と、その受容のされ方の分析により、今日揺らぎが指摘される日本型シティズンシップの特徴を明らかにする。

### 3 結果・結論

戦後の日本型シティズンシップのアイデンティティは、いわゆる55年体制と同時期に確立された。先端的な諸作品は、そのアイデンティティをナショナルとコスモポリタンを止揚したのものとして構想し、作品化していた。その背後にある領域横断的な表現者や運動家のネットワークもまた、こうした問題意識を共有していた。これが、想定される結論である。もちろん、こうした構想がどのように帰結したかは別に検討される。

※ 本報告は科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究「55年体制と日本型シティズンシップの形成：丹下健三・花田清輝・大西巨人」（課題番号15K13077）の研究成果である。